

バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 (II)

一谷 彊・西川 満・林 勝造

A Study of Tree-Drawing Patterns in Koch's Baumtest with Special Reference to Junior High School Children Who Have Behavior Disorders of Delinquency or School Refusal (II)

Tsuyoshi ICHITANI, Mitsuru NISHIKAWA and Katsuzo HAYASHI

Received October 31, 1983.

抄録 中学生の非行児と登校拒否児について、intake 段階で K. Koch のバウムテストを実施、すでに考案された『バウムテスト整理表』を用いて、バウム画について、比較検討した。本研究においては、臨床群（非行児 対 登校拒否児）、性別（男 対 女）、予後（改善 対 不変）の3種の要因を同時に配置して吟味検討し、今後のこうした児童への処遇のあり方、治療ないし矯正教育のあり方、ないしは、カウンセリング、指導、助言、介助、援助などへの示唆を得ることが主たる目的となった。その結果、上記3要因を考慮しての分散分析から、とりわけ、空間利用の領域のあり方、樹木の強調部分、根の描出パターン、幹の描出の仕方、枝の描出、運筆の様態などに主効果、交互作用、二次交互作用にかなりの差を見出した。とりわけ、臨床群の主効果、予後の主効果、臨床群と予後との交互作用は今後の彼らの処遇や治療、カウンセリングのあり方に示唆を与えるものであった。すなわち、これら下位群の持つ内的、心理的過程や、それに伴っての環境認知の様相に有意な差のあることを見出した。性差の要因については貴重な結果が見られたが、解釈的には困難なものであった。

索引語 バウムテスト 非行 登校拒否 予後 中学生

Abstract. The purpose of the present study was, taking into consideration of the prognosis and the sex difference at the same time, to compare the junior high school delinquent children's tree-drawing patterns with the school refusal children's, with special reference to Koch's Baumtest. Using the Baumtest Tabulation Sheet, the tree-drawing patterns of each child were scored. The scoring categories which found the differences of the drawing patterns among the subgroups were as follows: (i) the areas of space of the paper used to draw a tree, (ii) the parts of a tree which were em-

phatically expressed, (iii) the drawing patterns of the roots, the trunk outline, and the branches, (iv) the touching patterns for drawing a tree, and so on. These differences were found in some of the main factor effects, the primary interaction effects and the secondary interaction effects. Especially speaking, the results of some of the primary interaction effects of the clinical groups' factor (delinquency versus school refusal) by the prognosis ("good" versus "poor") gave many valuable suggestions for the future clinical management, therapy or counseling. But the results found in relation to the sex difference were difficult to interpret.

Key Words. Baumtest, Delinquency, School Refusal, Prognosis, and Junior High School Children.

I 導入——問題と目的——

非行ないしは登校拒否という反社会的あるいは非社会的行動異常 (behavior disorders) や適応障害を示す中学生が、どのような心理的な内的特徴や性格特性を持っているのか、どのように外界や環境を認知しているのかを理解し、その指導や助言・援助・カウンセリング・心理治療あるいは処遇への一助とするために、すでに我々は、K. Koch (1949) の創案になる Baumtest (バウムテスト: Koch, C., 1952; Koch, C. (著) 林・国吉・一谷 (訳), 1970) を適用して、登校拒否の中学生と非行のそれとの樹木描出パターンを、先に開発した『バウムテスト整理表』(国吉・林・一谷・津田・斉藤, 1980) を用いて検討してきた (一谷・西川, 1983)。そこでは、登校拒否または非行の適応障害をもつ中学生について、主として、この要因 (非行 対 登校拒否) の側面から性別 (男 対 女) を考慮に入れてバウムテストの描画を検討するとともに、特に非行群のみについては、予後との関係において、「一過性群 対 要再指導群」という要因と「男 対 女」(性別) の要因とを配置して吟味するにとどめた。

今回はその一環として、「非行 対 登校拒否」(要因A), 「男 対 女」(要因B), 予後の「改善 対 不変」(要因C) を同時に考慮して吟味検討した結果について報告することが目的である。

これまでこのバウムテストを用いての臨床的・リサーチ (clinical research) 的なアプローチとしては、林・一谷 (1973) によるものが挙げられ、そこでは、場面緘黙症児、精神遅滞児、双生児等々が報告されている。また、不純異性交遊児童に関する研究 (一谷・山下・津田・林・国吉, 1983), 高校生での不適応行動に関するもの (一谷・横山, 1979), 中学生での登校拒否に関するもの (村澤・一谷・西川, 1982) などが、我々の手元で研究されてきた主なものである。

しかし、非行群と登校拒否群とを同時に比較検討したものは、本研究に先立っての報告 (一谷・西川, 1983) だけであるように思う。それも、上述のような点で不備があったので、ここでは上記の3つの要因 (「非行 対 登校拒否」, 「男 対 女」, 「(予後の) 改善 対 不変」) を同時に考慮して吟味を加えることにする。そして、このような基本的なリサーチ的データが少しずつでも累積されることによって、学校や相談機関等で利用する場合の一助にしたい。

バウムテストは、その実施方法の簡便性のゆえに、教育実践の場や相談機関ではいろいろな形で利用されている場合が多いものと理解しているが、臨床的・リサーチ的な基礎資料が十分に揃っているとはいえないのが現状ではなかろうか。この点が、バウムテストの解釈に際しても、ややもすると、主観的解釈や判断に陥っているひとつの原因となっている。こうした問題を多少とも克服するために、ここにそうした基礎となる資料の一部を報告するものである。

Ⅱ 方 法

1. 対象児：

先の一谷・西川（1983）による研究報告と同じ被験児（中学生）である。具体的には、表1のとおりである。これらの詳細については、一谷・西川（1983）に記載されているので、ここでは詳しく言及することは避ける。

表1 被験者の内訳

		A			A ₂ 登校拒否			全 体
		A ₁	非 行		B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C	B	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
予後	C ₁ 改善	23	5	28	13	5	18	46
	C ₂ 不変	19	10	29	12	9	21	50
計		42	15	(57)	25	14	(39)	[96]

(注) 予後 { 改善=非行では「一過性」を、登校拒否では「登校」を示す。
 { 不変=非行では「要再指導」を、登校拒否では「断続登校、不登校」を示す。

2. 手続き：

いずれの対象児についても、児童相談所での intake 時に、Koch, K. (1949) の指示している教示に従ってバウムテストを実施した。

これらのバウムテストを『バウムテスト整理表』と『手引き』（国吉・林・一谷・津田・斉藤，1980）に基づいて整理、全体的所見、風景及び付属物、地平、根、幹、枝、冠、果・花・葉、発達遅滞と退行、運筆などの全項目にわたってチェック、集計のうえ検定にかけた。なお検定にさいしては、比率（パーセント）を角変換し、先に述べた3要因について分散分析を行ない、ここから誘導された x^2 -値に基づいて有意差をみることとした（岩原，1977）。

Ⅲ 結果と考察

1. 空間利用の領域について：

表2（表2-1から表2-21まで）は、空間利用の領域の様相について要因A（症状群）「非行（A₁）対 登校拒否（A₂）」、要因B（性別）「男（B₁）対 女（B₂）」及び要因C（予後）「改善（C₁）対 不変（C₂）」の3要因によって分類して、その出現頻度とパーセント（括弧内に示す）を示したものである。〔これらの採択基準等については、『バウムテスト整理表—手引き—』（国吉・林・一谷・津田・斉藤，1980）を参照されたい。〕

表2 非行群と登校拒否群における「空間利用の領域」の出現率
(予後の「改善 対 不変」と「男 対 女」の要因を考慮したもの)

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	3(13.0)	1(20.0)	4(14.3)	4(30.8)	1(20.0)	5(27.8)	9(19.6)
C ₂ 不变	3(15.8)	2(20.0)	5(17.2)	1(8.3)	4(44.4)	5(23.8)	10(20.0)
計	6(14.3)	3(20.0)	9(15.8)	5(20.0)	5(35.7)	10(25.6)	19(19.8)

(非: 登 = 15.8 : 25.6)
 男: 女 = 16.4 : 27.6
 改: 不 = 19.6 : 20.0
 全体 = 19.8 %

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	6(26.1)	1(20.0)	7(25.0)	1(7.7)	0(0)	1(17.4)	8(17.4)
C ₂ 不変	3(15.8)	2(20.0)	5(17.2)	4(33.3)	1(11.1)	5(23.8)	10(20.0)
計	9(21.4)	3(20.0)	12(21.1)	5(20.0)	1(7.1)	6(15.4)	18(18.8)

(非: 登 = 21.1 : 15.4)
 男: 女 = 20.9 : 13.8
 改: 不 = 17.4 : 20.0
全体 = 18.8 %

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	(非: 登 = 0 : 17.9) 男: 女 = 4.5 : 13.8 改: 不 = 2.2 : 12.0 全体 = 7.3 %
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(20.0)	1(5.6)	1(2.2)	
C ₂ 不変	0(0)	0(0)	0(0)	3(25.0)	3(33.0)	6(28.6)	6(12.0)	
計	0(0)	0(0)	0(0)	3(12.0)	4(28.6)	7(17.9)	7(7.3)	

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	18 (78.0)	3 (60.0)	21 (75.0)	8 (61.5)	3 (60.0)	11 (61.1)	32 (69.6)
C ₂ 不変	11 (57.9)	7 (70.0)	18 (62.1)	6 (50.0)	8 (88.9)	14 (66.7)	32 (64.0)
計	29 (69.0)	10 (66.7)	39 (68.4)	14 (56.0)	11 (78.6)	25 (64.1)	64 (66.7)

(非: 登 = 68.4 : 64.1)
 男: 女 = 64.2 : 72.4
 改: 不 = 69.6 : 64.0
全体 = 66.7 %

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	19 (82.6)	4 (80.0)	23 (82.1)	11 (84.6)	5 (100)	16 (88.9)	39 (84.8)
C ₂ 不変	18 (94.7)	9 (90.0)	27 (93.1)	11 (91.7)	9 (100)	20 (95.2)	47 (94.0)
計	37 (88.1)	13 (86.7)	50 (87.7)	22 (88.0)	14 (100)	36 (92.3)	86 (89.6)

(非: 登 = 87.7 : 92.3)
 男: 女 = 88.1 : 93.1
 改: 不 = 84.8 : 94.0
 全体 = 89.6 %

表2-6 空間利用の領域（「6」の利用）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	16(69.6)	4(80.0)	20(71.4)	8(61.5)	2(40.0)	10(55.6)	30(65.2)	(非:登 = 71.9 : 35.9) 男:女 = 62.7 : 44.8 改:不 = 65.2 : 50.0 全体 = 57.3 %
C ₂ 不変	15(78.9)	6(60.0)	21(60.0)	3(25.0)	1(11.0)	4(19.0)	25(50.0)	
計	31(73.8)	10(66.7)	41(71.9)	11(44.0)	3(21.4)	14(35.9)	55(57.3)	

表2-7 空間利用の領域（「7」の利用）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	2(8.7)	2(40.0)	4(14.3)	2(15.4)	1(20.0)	3(16.7)	7(15.2)	(非:登 = 19.3 : 20.5) 男:女 = 16.4 : 27.0 改:不 = 15.2 : 24.0 全体 = 19.8 %
C ₂ 不変	5(26.3)	2(20.0)	7(24.1)	2(16.7)	3(33.3)	5(23.8)	12(24.0)	
計	7(16.7)	4(26.7)	11(19.3)	4(16.0)	4(28.6)	8(20.5)	19(19.8)	

表2-8 空間利用の領域（「8」の利用）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	2(8.7)	2(40.0)	4(14.3)	0(0)	0(0)	0(0)	4(8.7)	(非:登 = 17.5 : 7.7) 男:女 = 10.4 : 20.7 改:不 = 8.7 : 18.0 全体 = 13.5 %
C ₂ 不変	3(15.8)	3(30.0)	6(20.7)	2(16.7)	1(11.1)	3(14.3)	9(18.0)	
計	5(11.9)	5(33.3)	10(17.5)	2(8.0)	1(7.1)	3(7.7)	13(13.5)	

表2-9 空間利用の領域（「9」の利用）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	0(0)	0(0)	0(0)	1(7.7)	1(20.0)	2(11.1)	2(4.3)	(非:登 = 1.8 : 5.1) 男:女 = 1.5 : 6.9 改:不 = 4.3 : 2.0 全体 = 3.1 %
C ₂ 不変	0(0)	1(10.0)	1(3.4)	0(0)	0(0)	0(0)	1(2.0)	
計	0(0)	1(6.7)	1(1.8)	1(4.0)	1(7.1)	2(5.1)	2(3.1)	

表2-10 「A」の領域の利用（「A」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	0(0)	1(20.0)	1(3.6)	4(31.8)	1(20.0)	5(27.8)	6(9.0)	(非:登 = 7.0 : 15.4) 男:女 = 9.0 : 13.8 改:不 = 9.0 : 13.8 全体 = 10.4 %
C ₂ 不変	1(5.3)	2(20.0)	3(10.3)	1(8.3)	0(0)	1(4.8)	4(13.8)	
計	1(2.4)	3(20.0)	4(7.0)	5(20.0)	1(7.1)	6(15.4)	10(10.4)	

表2-11 「B」の領域の利用（「B」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	1(4.3)	1(20.0)	2(7.1)	2(15.4)	0(0)	2(11.1)	4(8.7)	(非:登 = 10.5 : 7.1) 男:女 = 9.0 : 13.8 改:不 = 8.7 : 12.0 全体 = 10.4 %
C ₂ 不変	2(10.5)	2(20.0)	4(13.8)	1(8.3)	1(11.1)	2(9.5)	6(12.0)	
計	3(7.1)	3(20.0)	6(10.5)	3(12.0)	1(7.1)	4(10.3)	10(10.4)	

表2-12 「C」の領域の利用（「C」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	1(4.3)	1(20.0)	2(7.1)	1(7.7)	0(0)	1(5.6)	3(6.5)	(非:登= 7.0: 5.1 男:女= 6.0: 6.9 改:不= 6.5: 6.0 全体= 6.3%)
C ₂ 不変	2(10.5)	0(0)	2(6.9)	0(0)	1(11.1)	1(4.8)	3(6.0)	
計	3(7.1)	1(6.7)	4(7.0)	1(4.0)	1(7.1)	2(5.1)	6(6.3)	

表2-13 「D」の領域の利用（「D」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	2(8.7)	3(60.0)	5(17.9)	3(23.1)	1(20.0)	4(22.2)	9(19.6)	(非:登= 17.5: 20.5 男:女= 19.4: 17.2 改:不= 19.6: 18.0 全体= 18.8%)
C ₂ 不変	5(26.3)	0(0)	5(17.2)	3(25.0)	1(11.1)	4(19.0)	9(18.0)	
計	7(16.7)	3(20.0)	10(17.5)	6(24.0)	2(14.3)	8(20.5)	18(18.8)	

表2-14 「E」の領域の利用（「E」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	4(17.4)	3(60.0)	7(25.0)	3(23.1)	1(20.0)	4(22.2)	11(23.9)	(非:登= 28.1: 20.5 男:女= 25.4: 24.1 改:不= 23.9: 26.0 全体= 25.0%)
C ₂ 不変	7(36.8)	2(20.0)	9(31.0)	3(25.0)	1(11.1)	4(19.0)	13(26.0)	
計	11(26.2)	5(33.3)	16(28.1)	6(24.0)	2(14.3)	8(20.5)	24(25.0)	

表2-15 「F」の領域の利用（「F」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	1(4.3)	3(60.0)	4(14.3)	1(7.7)	1(20.0)	2(11.1)	6(13.0)	(非:登= 14.0: 10.3 男:女= 10.4: 17.2 改:不= 13.0: 12.0 全体= 12.5%)
C ₂ 不変	3(15.8)	1(10.0)	4(13.8)	2(16.7)	0(0)	2(9.5)	6(12.0)	
計	4(9.5)	4(26.7)	8(14.0)	3(12.0)	1(7.1)	4(10.3)	12(12.5)	

表2-16 「G」の領域の利用（「G」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	2(8.7)	2(40.0)	4(14.3)	0(0)	1(20.0)	1(5.6)	5(10.9)	(非:登= 10.5: 2.6 男:女= 6.0: 10.3 改:不= 10.9: 4.0 全体= 7.3%)
C ₂ 不変	2(10.5)	0(0)	2(6.9)	0(0)	0(0)	0(0)	2(4.0)	
計	4(9.5)	2(13.3)	6(10.5)	0(0)	1(7.1)	1(2.6)	7(7.3)	

表2-17 「H」の領域の利用（「H」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計	
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計		
C ₁ 改善	0(0)	2(40.0)	2(7.1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(4.3)	(非:登= 10.5: 5.1 男:女= 4.5: 17.2 改:不= 4.3: 12.0 全体= 8.3%)
C ₂ 不変	2(10.5)	2(20.0)	4(13.8)	1(8.3)	1(11.1)	2(9.5)	6(12.0)	
計	2(4.8)	4(26.7)	6(10.5)	1(4.0)	1(7.1)	2(5.1)	8(8.3)	

表2-18 「I」の領域の利用（「I」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	0(0)	3(60.0)	3(10.7)	1(7.7)	1(20.0)	2(11.1)	5(10.9)
C ₂ 不変	3(15.8)	1(10.0)	4(13.8)	1(8.3)	0(0)	1(4.8)	5(10.0)
計	3(7.1)	4(26.7)	7(12.3)	2(8.0)	1(7.1)	3(7.7)	10(10.4)

(非:登=12.3: 7.7)
 男:女= 7.5:17.2
 改:不=10.9:10.0
 全体=10.4%

表2-19 「J」の領域の利用（「J」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	2(8.7)	3(60.0)	5(17.9)	3(23.1)	0(0)	3(16.7)	8(17.4)
C ₂ 不変	2(10.5)	1(10.0)	3(10.3)	0(0)	0(0)	0(0)	3(6.0)
計	4(9.5)	4(26.7)	8(14.0)	3(12.0)	0(0)	3(7.7)	11(11.5)

(非:登=14.0: 7.7)
 男:女=10.4:13.8
 改:不=17.4: 6.0
 全体=11.5%

表2-20 「K」の領域の利用（「K」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	7(30.4)	2(40.0)	9(32.1)	3(23.1)	1(20.0)	4(22.2)	13(28.3)
C ₂ 不変	5(26.3)	2(20.0)	7(24.1)	2(16.7)	3(33.3)	5(23.8)	12(24.0)
計	12(28.6)	4(26.7)	16(28.1)	5(20.0)	4(28.5)	9(23.1)	25(26.0)

(非:登=28.1:23.1)
 男:女=25.4:27.6
 改:不=28.3:24.0
 全体=26.0%

表2-21 「L」の領域の利用（「L」へのはみ出し）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	4(17.4)	2(40.0)	6(21.4)	1(7.7)	1(20.0)	2(11.1)	8(17.4)
C ₂ 不変	2(10.5)	1(10.0)	3(10.3)	2(16.7)	1(11.1)	3(14.3)	6(12.0)
計	6(14.3)	3(20.0)	9(15.8)	3(12.0)	2(14.2)	5(12.8)	14(14.6)

(非:登=15.8:12.8)
 男:女=13.4:17.2
 改:不=17.4:12.0
 全体=14.6%

先ず、主効果についてみると、画面内の「3」の領域（左下）を利用するものは、1%水準以下で登校拒否群の方が非行群より多いことがうかがえる。具体的には、非行群で0%、登校拒否群で17.9%となっており、総じて出現率の低いなかであって、登校拒否群に有意に多いのである。この領域は、空間象徴的には、「発端・退行」、「停止」、「幼児期への固着」を示唆するものとされている(Koch, K., 1949: C. コッホ(著)林・一谷・国吉(訳)1970)。Grünwaldのいわゆる「置きテスト(Legetest)」では、左下は原初、起源であり、“そこでは私は小さくほんとうに幼かった、とるに足らなかった”と答えるものが多かったとされている。こうしたことから、登校拒否児の方が、非行児に比して、少ないなかにも年齢的退行としての、あるいは、幼児期への固着(fixation)としての登校拒否を呈しているもののあることを示唆しているように考えられる。

画面内の「6」の領域（中央下）や、「8」の領域（右中）を利用するものは、それぞれ、A₁:A₂=71.9%:35.9%、A₁:A₂=17.5%:7.7%となっており、いずれもそれぞれにパーセ

表3 空間利用の領域の出現率の3要因の分散分析の結果
 （出現率を角変換し，分散分析して χ^2 -値を求めた結果による。）

変動因 項目	A 非：登	B 男：女	C 改：不	A × B	B × C	A × C	A × B × C
画面内領域	1						登女>登男改>登女改≠非女不≠非女改 ≠非男不≠非男改>登男不 P<.20
	2 非>登 P<.20					非改≠登不>非不 >登改 ↑	
	3 登>非 **		改<不 P<.20			登不>登改≠非不 ≠非改 P<.20	
	4				女不≠男改>女改 ≠男不 ↑		
	5 非<登 P<.20			登女>非男≠非女 ≠登男 ↑			
	6 非>登 **		改>不 ↑			非不=非改>登改 >登不 P<.20	
	7						非女改≠登女不>非男不≠非女不≠登女改 ≠登男不≠登男改>非男改 P<.20
	8 非>登 **		改<不 ↑	非女>非男≠登男 ≠登女 P<.20		非不>非改≠登不 >登改 P<.20	
	9					登改>非不≠非改 ≠登不 *	
画面外領域へはみ出し	A			非女≠登男>登女 >非男 *		登改>非不≠登不 ≠非改 *	
	B			非女>登男>非男 ≠登女 ↑			
	C						非女改>非男不≠登女不≠登男改>非男改 ≠非女不≠登男不≠登女改 *
	D		改>不 P<.20		女改>男不>男改 ≠女不 **		非女改>非男不≠登男不≠登男改≠登女改 >非男改≠非女不≠登女不 *
	E 非>登 P<.20				女改>男不>女不 ≠男改 ↑		
	F 非>改 P<.20		改>不 P<.20	非女>登男≠非男 ≠登女 ↑	女改>男不>男改 ≠女不 **		
	G 非>登 ↑		改>不 *		女改>男不≠男改 ≠女不 *		
	H 非>登 ↑	男<女 ↑	改<不 P<.20	非女>登男≠登女 ≠非男 ↑			
	I	男<女 P<.20	改>不 P<.20	非女>登男≠登女 ≠非男 ↑	女改>男不≠男改 ≠女不 **		
	J 非>登 **		改>不 *	非女>登男≠非男 >登女 *			非女改>登男改>非男不≠非女不≠非男改 ≠登男不≠登女改≠登女不 *
	K						
	L						

(注) **→P<.01, *→P<.05, ↑→P<.10, P<.20→P<.20を示す。

ントの高低（多少）はあるが，2倍以上の比率で，非行群の方が有意に多く利用していることがうかがえる。先と同様，Grünwaldの空間図式にあてはめてみると，「6」については示唆的に「物質性，下意識，無意識」を，「8」については内向よりも外向的傾向，内省よりは行為という点がほのめかされており，適応障害的に考えてみても，非行児の方が多くこの領域を利用することが理解できるように思える。

画面外へのはみ出し的描出についてみると，「G」（右下の右側），「H」（中央右），「J」（右上の上側）で非行児の方が有意差または有意差傾向をもって多くはみ出しの描出をしていることがうかがえる。総じていえば，右側の方向に大きくはみ出して描くものがあることを示している。具体的には，「G」へのはみ出しが $A_1 : A_2 = 10.5\% : 2.6\%$ ，「H」へのはみ出しが A_1

： $A_2=10.5\%:5.1\%$ ，「J」へのはみ出しが $A_1:A_2=14.0\%:7.7\%$ となっていて，いずれも出現率は低いが，非行児の方が登校拒否児に比して2倍近く，ないしはそれ以上に多いことがうかがえるのである。画面を現実の与えられた生活空間とみると，非行児の方がそこからはみ出し，現実吟味の力が相対的に弱いとでもいったらよいのではなかろうか。

このことはまた，非行児の方が登校拒否児に比して自我肥大(ego-inflation)的な傾向を示しているものとうけとることができるかもしれない。

以上のように，非行児と登校拒否児とを主効果としてみると，総じて，前者が大きなバウムを描くのに対して，登校拒否児の方は小さな，いわば自我収縮(ego-constricted)的なバウムを描出することが考えられる。そして，現実の置かれた環境との関係においてみるときもまた，上と同様な形での行動様式になる可能性をほのめかしているようにも理解できるのである。

次に主効果のうち，B要因(「男 対 女」)の性差についてみてみよう。ここでの主効果は，「H」へのはみ出しが，女兒に有意差傾向をもって多いことが示されている。具体的には $B_1:B_2=4.5\%:17.2\%$ と，低いながら女兒において男児の4倍近くに達している。ここでは，次のような点が象徴的には指摘しうるかもしれない。すなわち，「H」の方向は，Grünwald では，内向性に対する外向性，内省に対峙するものとしての行為，母に対しての父，女に対しての男などが示唆されていて，女兒においては，母とともに父の存在が大切なことをほのめかしている。このような点からみると，女兒の場合，非行にせよ登校拒否にせよ，父なる存在，女に対しての男のあり方のようなものに対して敏感であるのではないかということをおぼろげに面がある。

第3の主効果としての予後の「改善 対 不変」(要因C)についてみてみると次のようなことがうかがえる。

予後改善群は，「6」(中央下)の領域を用いるものが予後不変群に比して有意に多い($C_1:C_2=65.2\%:50.0\%$)が，「8」(右中)の領域を用いるものはパーセントは低いが逆に不変群に有意に多い($C_1:C_2=8.7\%:18.0\%$)ことを示している。一方，領域外へのはみ出し的描出をみてみると，「G」(右下右)へのはみ出しは $C_1:C_2=10.9\%:4.0\%$ と，共に低率ながら改善群に有意に多く，「J」(右上上)へのはみ出しは $C_1:C_2=17.4\%:6.0\%$ と，これも低率ながら改善群に有意に多い。

改善群と不変群とのあいだのこのような結果については，表3の交互作用効果をみるとある程度理解可能な面があるように思う。そこで先ず，交互作用効果のうち $A \times C$ についてみることにしたい。ここでは，「2」(画面内の「左中」)の利用が，非行改善群≒登校拒否不変群>非行不変群>登校拒否改善群($25.0\% \approx 23.8\% > 17.2\% > 5.6\%$)となっていることがうかがえる。非行が改善された群(A_1C_1 群)では，「内省的傾向」があることを示唆しており，この群と類似した出現比率(利用率)を示す登校拒否不変群(A_2C_2 群)では，「過去への執着」，「母への愛着」などをほのめかしているものと解するのが妥当のように思われるのである。これらの2群とはかなり離れての利用率を示す登校拒否改善群(A_2C_1 群)では，上の登校拒否不変群(A_2C_2 群)とは逆に，「過去への執着」，「母への愛着」の領域から脱却しつつあり，あるいは，脱却しえたことを物語っているのではなかろうか。そして，非行不変群(A_1C_2 群)では「内省的傾向」の貧困をほのめかしているものとみるのが妥当のようである。このように，

同一の空間領域を利用するにしても、群によって、また、下位群によって、その解釈仮説は一義的には適用しがたい、あるいは、適用すべきでないことが理解できるのである。これは、投影法一般について言えることで、そこが投影法の持つひとつの特色であり、同時にそれは、長所であるとともに困難点といえるのかもしれない。いずれにせよ、上述のような解釈的見地に立つと、それぞれの群の空間利用の様式がよく理解できると思う。

「6」（中央下）の領域の利用率は、非行不変群＝非行改善群＞登校拒否改善群＞登校拒否不変群（72.4%＝71.4%＞55.6%＞19.0%）となっている。改善群にせよ、不変群にせよ、非行群（A₁C₂ 群、A₁C₁ 群）がこの領域の利用率の多いことは、「物質性」、「下意識」、「無意識」を示唆しており、同時に、登校拒否群に比して大きな樹木画を描出し、エネルギーのあることを物語っているものといえるだろう。登校拒否不変群（A₂C₂ 群）が登校拒否改善群（A₂C₁ 群）よりはるかに利用率の低いことは、エネルギーの低さ、自我収縮的傾向を示しているものと考えてよいのではあるまいか。

「9」（右下）の領域の利用率は、登校拒否改善群＞非行不変群＝非行改善群＝登校拒否不変群（11.1%＞3.4%＝0%＝0%）と極めて低率ながら、このような傾向を示している。登校拒否改善群（A₂C₁ 群）が、多少とも、この領域を利用して大きく樹木画を描出するもののあることを物語っているのである。

はみ出し的描出についてみると、「A」についてのみ登校拒否改善群＞非行不変群＝登校拒否不変群＝非行改善群（27.8%＞10.3%＝4.8%＝3.6%）となって、10%水準で有意差のある傾向がみられる。自我収縮的傾向のある登校拒否群（B₁C₁ 群、B₁C₂ 群）のなかであって、予後改善群（B₁C₁ 群）にこの領域を利用するもののあることは、回避、抑制的傾向をもち、生への傍観の環境への対処を示しつつも、大きな樹木描出をしているところに改善への示唆を与えているものと解してよいのではなかろうか。

他のはみ出し的描出については、A×Cの交互作用効果を認めることができない。この事実は、主効果についてのみみているのでは十分でないことを物語っており、とりわけ、主効果のうちでもC要因（予後の「改善」と「不変」）のみについてみたとき、かなり有意差のあるものや有意差傾向のあるものをみることができるが、これは主効果のみでみるときほど重要な解釈的意味をもたないものと考えた方が穏当で、交互作用効果をよくみるべきではないかと思われるのである。

ところで、その他の交互作用効果（「A×B」とか「B×C」）のように、性差（男 対 女）の関与するものについては、かなり解釈が複雑になってくるように思える。性差の問題は解釈的には非常に難しい側面を含んでいる。A×Bの交互作用についてみてみると、全般的には、非行女子群（A₁B₂ 群）が「5」や「8」の領域を他の群に比して利用するものが多く、かつ、はみ出し的描出（「A」、「B」、「F」、「H」、「I」、「J」）も多いことを示しているのである。最近の女子非行の傾向をみると、男子非行に比して、全体的には低率ながら、増加の傾向を示してきており、しかも、男子非行とは異質なもの（たとえば不純異性交遊などのように）を含んでいる。そして、彼女たちの訴えに耳を傾けてみると、ダメ女になり始めると、とことんダメ女で徹底し、落ちるところまで落ちてしまえといったような心理的雰囲気を持たせられているものも少なくはないのである。こうした点を考えあわせてみると、上に記述したような樹木

描出についても、それ相応の理解は可能なように思える。けれども、こうした解釈にしても、どちらかといえばやや一義的、直線的で危険がある。そうした意味で、ここではあえて慎重を期して解釈をさしひかえたいと思う。もちろん、 $B \times C$ の交互作用についてもそのことはいえる。

ただ注目すべき点は、今回の研究報告に関する限り、 $A \times B$ の交互作用については、今も上で述べたように、女子非行群（ $A_1 B_2$ 群）ではみ出し的描出が多いとともに、 $B \times C$ の交互作用では、女子改善群（ $B_2 C_1$ 群）にはみ出し的描出が多いことが目立っている。女子群（非行：登校拒否や、改善：不変のいかんを問わず）が全体的に対象児の少ないことも一因と思えるが、ここにもやはり、行動様式が反社会的か非社会的かのいかんを問わず、心的エネルギー（はみ出すほどに大きく描出する）のあることが改善への心的エネルギーを持ち、改善への努力的傾向も示唆するものと考えられる面があるようにもうかがえるのである。

いずれにせよ、これ以上のことはあまりにも主観的になりすぎて危険があるのでさしひかえる方がよいと思う。一人一人の生育史や生育環境、反社会的行動や非社会的行動にいたる経過などをもっと精査したうえでのことではないと、本当に個々の児童を理解したことにならないと考える。その点、リサーチ的な研究には限界のあることを卒直に認めなくてはならないと考えている。けれども、モーダルな傾向を示すことによって、解釈への示唆を与えることもまた重要で、交互作用効果の出ること自体が、男児なり女児なりに応じて解釈仮説を変えていくこと、ないしは、解釈仮説のうちのいずれを採択するか重要な手がかりを与えているものだろうと思われるのである。

二次交互作用（ $A \times B \times C$ ）については、表3に示すようにいくつかの領域についてみられるけれども、交互作用（「 $A \times B$ 」, 「 $B \times C$ 」, 「 $A \times C$ 」）以上に複雑な側面を含んでいるので、ここでは表に示す程度にとどめておきたい。その理由については、すでに交互作用効果について言及したのと同様である。

2. 『バウムテスト整理表』の項目にみられる出現率の差異について：

表4（表4-1から表4-25まで）は、3要因（A要因：非行 対 登校拒否，B要因：男 対 女，C要因：予後の改善 対 不変）を考慮して、バウムテスト整理表の各項目について検討吟味し、いずれかの変動因に有意差または有意差傾向を示したものを表示したものである。この結果をまとめて表示したものが表5である。ここではこれらの表を基にして、10%水準以下で有意差または有意差傾向を示したものについて考察を加えてみることにする。

まず主効果のうち、A要因（非行 対 登校拒否）についてみてみよう。

非行群（ A_1 ）の方が登校拒否群（ A_2 ）に比して出現率の高い項目は、

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| ① X強調B：1. 右強調 | $A_1 : A_2 = 35.1\% : 5.1\%$ |
| ② 幹Ⅶ：輪廓3. 散漫な線 | $A_1 : A_2 = 40.4\% : 25.6\%$ |
| ③ 運筆：4. 強圧 | $A_1 : A_2 = 26.3\% : 10.3\%$ |

である。これらの傾向から、非行群が登校拒否群に比して、自己顕示、自己拡大、重要でありたいという欲求、集中力の欠如、易刺激性、落ちつきのなさ（以上「右強調」より）を示すとともに、感受性が強く、境界認識がはっきりせず、浮動状態で（以上「散漫な線」より）、本能的に落ちつきがなく、感情が蓄積されていて、抵抗感があり、短気な面をもっている（以上

表4 『バウムテスト整理表』の項目における非行群と登校拒否群の出現率
 （予後の「改善 対 不変」と「男 対 女」の要因を考慮したもの）

表4-1 X強調B. 1.右強調

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	4(17.4)	2(40.0)	6(21.4)	1(7.7)	0(0)	1(5.6)	7(15.2)
C ₂ 不変	7(36.8)	7(70.0)	14(48.3)	1(8.3)	0(0)	1(4.8)	15(30.0)
計	11(26.2)	9(60.0)	20(35.1)	2(8.0)	0(0)	2(5.1)	22(22.9)
	男 13 (19.4)			女 9 (31.0)			

(非:登 = 35.1 : 5.1
 男:女 = 19.4 : 31.4
 改:不 = 15.2 : 30.0
 全体 = 22.9 %)

表4-2 X強調B. 2.左強調

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	11(47.8)	0(0)	11(39.3)	7(53.8)	1(20.0)	8(44.4)	19(41.3)
C ₂ 不変	3(15.8)	0(0)	3(10.3)	5(41.7)	1(11.1)	6(28.6)	9(18.0)
計	14(33.3)	0(0)	14(24.6)	12(48.0)	2(14.3)	14(35.9)	28(29.2)
	男 26 (38.8)			女 2 (6.7)			

(非:登 = 24.6 : 35.9
 男:女 = 38.8 : 6.7
 改:不 = 41.3 : 18.0
 全体 = 29.2 %)

表4-3 X強調B. 3.平衡

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	8(34.8)	3(60.0)	11(39.3)	5(38.5)	4(80.0)	9(50.0)	20(43.5)
C ₂ 不変	9(47.4)	3(30.0)	12(41.4)	6(50.0)	8(88.9)	14(66.7)	26(52.0)
計	17(40.5)	6(40.0)	23(40.4)	11(44.0)	12(85.7)	23(59.0)	46(47.9)
	男 28 (41. 8)			女 18 (62.1)			

(非:登 = 40.4 : 59.0
 男:女 = 41.8 : 62.1
 改:不 = 43.5 : 52.0
 全体 = 47.9 %)

表4-4 XI傾向: 1.右への傾向

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	5(21.7)	1(20.0)	6(21.4)	4(30.8)	1(20.0)	5(27.8)	11(23.9)
C ₂ 不変	4(21.1)	1(10.0)	5(17.2)	2(16.7)	0(0)	2(9.5)	7(14.0)
計	9(21.4)	2(13.3)	11(19.3)	6(24.0)	1(7.1)	7(17.9)	18(18.8)
	男 15 (22.4)			女 3 (10.3)			

(非:登 = 19.3 : 17.9
 男:女 = 22.4 : 10.3
 改:不 = 23.9 : 14.0
 全体 = 18.8 %)

表4-5 XI傾向: 3.傾向なし

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	15(65.2)	4(80.0)	19(67.9)	8(61.5)	4(80.0)	12(66.7)	31(67.4)
C ₂ 不変	15(78.9)	9(90.0)	24(82.8)	9(75.0)	9(100)	18(85.7)	42(84.0)
計	30(71.4)	13(86.7)	43(75.4)	17(68.0)	13(92.9)	30(76.9)	73(76.0)
	男 47 (70.1)			女 26 (89.7)			

(非:登 = 75.4 : 76.9
 男:女 = 70.1 : 89.7
 改:不 = 67.4 : 84.0
 全体 = 76.0 %)

表4-6 XII傾斜：1.右への傾斜

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	6(26.1)	0(0)	6(21.4)	4(30.8)	2(40.0)	6(33.3)	12(26.1)
C ₂ 不変	5(26.3)	1(10.0)	6(20.7)	6(50.0)	1(11.1)	7(33.3)	13(26.0)
計	11(26.2)	1(6.7)	12(21.1)	10(40.0)	3(21.4)	13(33.3)	25(26.0)
	男 21 (31.3)			女 4 (13.8)			

(非:登 = 21.1 : 33.3)
 男:女 = 31.3 : 13.8
 改:不 = 26.1 : 26.0
 全体 = 26.0 %

表4-7 地平線：1.地平線なし

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	15(65.2)	2(40.0)	17(60.7)	7(53.8)	3(60.0)	10(55.6)	27(58.7)
C ₂ 不変	12(63.2)	9(90.0)	21(72.4)	7(58.3)	6(66.7)	13(61.9)	34(68.0)
計	27(64.3)	11(73.3)	38(66.7)	14(56.0)	9(64.3)	23(59.0)	61(63.5)
	男 41 (61.2)			女 20 (69.0)			

(非:登 = 66.7 : 59.0)
 男:女 = 61.2 : 69.0
 改:不 = 58.7 : 68.0
 全体 = 63.5 %

表4-8 幹の基部：4.左ふくらみ

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	5(21.7)	1(20.0)	6(21.4)	5(38.5)	2(40.0)	7(38.9)	13(28.3)
C ₂ 不変	2(10.5)	2(20.0)	4(13.8)	1(8.3)	2(22.2)	3(14.3)	7(14.0)
計	7(16.7)	3(20.0)	10(10.5)	6(24.0)	4(28.5)	10(25.6)	20(20.8)
	男 13 (19.4)			女 7 (24.1)			

(非:登 = 10.5 : 25.6)
 男:女 = 19.4 : 24.1
 改:不 = 28.3 : 14.0
 全体 = 20.8 %

表4-9 幹の基部：5.右ふくらみ

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	5(21.7)	1(20.0)	6(21.4)	3(23.1)	2(40.0)	5(27.8)	11(23.9)
C ₂ 不変	0(0)	3(30.0)	3(10.3)	6(50.0)	2(20.0)	8(38.1)	11(22.0)
計	5(11.9)	4(26.7)	9(15.8)	9(36.0)	4(28.6)	13(33.3)	22(22.9)
	男 14 (20.9)			女 8 (27.6)			

(非:登 = 15.8 : 33.3)
 男:女 = 20.9 : 27.6
 改:不 = 23.9 : 22.0
 全体 = 22.9 %

表4-10 幹の基部：9.普通

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	6(26.1)	1(20.0)	7(25.0)	1(7.7)	1(20.0)	2(11.1)	9(19.6)
C ₂ 不変	10(52.6)	3(30.0)	13(44.8)	2(16.7)	2(22.2)	4(19.0)	17(34.0)
計	16(38.1)	4(26.7)	20(35.1)	3(12.0)	3(21.4)	6(15.4)	26(27.1)
	男 19 (28.4)			女 7 (24.1)			

(非:登 = 35.1 : 15.4)
 男:女 = 28.4 : 24.1
 改:不 = 19.6 : 34.0
 全体 = 27.1 %

表4-11 根: 根なし

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	12(52.2)	3(60.0)	15(53.6)	4(30.8)	5(100)	9(50.0)	24(52.2)
C ₂ 不変	15(78.9)	8(80.0)	23(79.3)	10(83.3)	8(88.9)	18(85.7)	41(82.0)
計	27(64.3)	11(73.3)	38(66.7)	14(56.0)	13(92.9)	27(69.2)	65(67.7)
	男 41 (61.2)			女 24 (82.8)			

(非:登 = 66.7 : 69.2
男:女 = 61.2 : 82.8
改:不 = 52.2 : 82.0
全体 = 67.7 %)

表4-12 根: 2~3本

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	4(17.4)	2(40.0)	6(21.4)	5(38.5)	0(0)	5(27.8)	11(23.9)
C ₂ 不変	0(0)	0(0)	0(0)	2(16.7)	0(0)	2(9.5)	2(4.0)
計	4(9.5)	2(13.3)	6(10.5)	7(28.0)	0(0)	7(17.9)	3(13.5)
	男 11 (16.4)			女 2 (6.9)			

(非:登 = 10.5 : 17.9
男:女 = 16.4 : 6.9
改:不 = 23.9 : 4.0
全体 = 13.5 %)

表4-13 幹V: 2.細い

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	4(17.4)	0(0)	4(14.3)	4(30.8)	0(0)	4(22.2)	8(17.4)
C ₂ 不変	2(10.5)	2(20.0)	4(13.8)	6(50.0)	2(22.2)	8(38.1)	12(24.0)
計	6(14.3)	2(13.3)	8(14.0)	10(40.0)	2(14.3)	12(30.8)	20(20.8)
	男 16 (23.9)			女 4 (13.8)			

(非:登 = 14.0 : 30.8
男:女 = 23.9 : 13.8
改:不 = 17.4 : 24.0
全体 = 20.8 %)

表4-14 幹VII: 輪廊 1.直線

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	5(21.7)	2(40.0)	7(25.1)	7(53.8)	4(80.0)	11(61.1)	18(39.1)
C ₂ 不変	4(21.1)	5(50.0)	9(31.0)	5(41.7)	4(44.4)	9(42.9)	18(36.0)
計	9(21.4)	7(46.7)	16(28.1)	12(48.0)	8(57.1)	20(51.3)	36(37.5)
	男 21 (31.3)			女 15 (51.7)			

(非:登 = 28.1 : 51.3
男:女 = 31.3 : 51.7
改:不 = 39.1 : 36.0
全体 = 37.5 %)

表4-15 幹VII: 輪廊 3.散漫な線

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	12(52.2)	2(40.0)	14(50.0)	0(0)	0(0)	0(0)	14(30.4)
C ₂ 不変	5(26.3)	4(40.0)	9(31.0)	6(50.0)	4(44.0)	10(47.6)	19(38.0)
計	17(40.5)	6(40.0)	23(40.4)	6(24.0)	4(28.6)	10(25.6)	33(34.4)
	男 23 (34.3)			女 10 (34.5)			

(非:登 = 40.4 : 25.6
男:女 = 34.3 : 34.5
改:不 = 30.4 : 38.0
全体 = 34.4 %)

表4-16 幹Ⅶ：輪廓 4.断線

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	7(30.4)	1(20.0)	8(28.6)	6(48.2)	1(20.0)	7(38.9)	15(32.6)
C ₂ 不変	10(52.6)	1(10.0)	11(37.9)	1(8.3)	1(11.1)	2(9.5)	13(26.0)
計	17(40.5)	2(13.3)	19(33.3)	7(28.0)	2(14.3)	9(23.1)	28(29.2)
	男 24 (35.8)			女 4 (13.8)			

（非：登 = 33.3 : 23.1
男：女 = 35.8 : 13.8
改：不 = 32.6 : 26.0
全体 = 29.2 %

表4-17 枝Ⅰ：1.枝なし（枝の数）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	C ₂ 女	計	
C ₁ 改善	3(13.0)	0(0)	3(10.7)	0(0)	1(20.0)	1(5.6)	4(8.7)
C ₂ 不変	4(21.1)	5(50.0)	9(31.0)	0(0)	3(33.3)	3(14.3)	12(24.0)
計	7(16.7)	5(33.3)	12(21.1)	0(0)	4(28.6)	4(10.3)	16(16.7)
	男 7 (10.4)			女 9 (31.0)			

（非：登 = 21.1 : 10.3
男：女 = 10.4 : 31.0
改：不 = 8.7 : 24.0
全体 = 16.7 %

表4-18 枝Ⅰ：2.4本以上（枝の数）

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	12(52.2)	5(100)	17(60.7)	10(76.9)	3(60.0)	13(72.2)	30(65.2)
C ₂ 不変	10(52.6)	2(20.0)	12(41.4)	10(83.3)	3(33.3)	13(61.9)	25(50.0)
計	22(52.4)	7(46.7)	29(50.9)	20(80.0)	6(42.9)	26(66.9)	55(57.3)
	男 42 (62.7)			女 13 (44.8)			

（非：登 = 50.9 : 66.9
男：女 = 62.7 : 44.8
改：不 = 65.2 : 50.0
全体 = 57.3 %

表4-19 枝Ⅵ：1.管状枝

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	15(65.2)	2(40.0)	17(60.7)	5(38.5)	2(40.0)	7(38.9)	24(52.2)
C ₂ 不変	7(36.8)	3(30.0)	10(34.5)	9(75.0)	1(11.0)	10(47.6)	20(40.0)
計	22(52.4)	5(33.3)	27(47.4)	14(56.0)	3(21.4)	17(43.6)	44(45.8)
	男 36 (53.7)			女 8 (27.6)			

（非：登 = 47.4 : 43.6
男：女 = 53.7 : 27.6
改：不 = 52.2 : 40.0
全体 = 45.8 %

表4-20 冠Ⅰ：7.枝葉型冠

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	8(34.8)	4(80.0)	12(42.9)	7(53.8)	2(40.0)	9(50.0)	21(45.6)
C ₂ 不変	10(52.6)	0(0)	10(34.5)	2(16.7)	2(22.0)	4(19.0)	14(28.0)
計	18(42.9)	4(26.7)	22(38.6)	9(36.0)	4(28.6)	13(33.3)	35(36.4)
	男 27 (40.3)			女 8 (27.6)			

（非：登 = 38.6 : 33.3
男：女 = 40.3 : 27.6
改：不 = 45.6 : 28.0
全体 = 36.4 %

表4-21 発達遅滞と退行：8.一線枝

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	1(4.3)	0(0)	1(3.6)	0(0)	0(0)	0(0)	1(2.2)
C ₂ 不変	2(10.5)	0(0)	2(6.9)	4(33.3)	1(11.1)	5(23.8)	7(14.0)
計	3(7.1)	0(0)	3(5.3)	4(16.0)	1(7.1)	5(12.8)	8(8.3)
	男 7 (10.4)			女 1 (3.4)			

(非:登= 5.3:12.8)
 男:女= 10.4: 3.4
 改:不= 2.2:14.0
全体= 8.3 %

表4-22 運筆：1.急速

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	2(8.7)	0(0)	2(7.1)	3(23.1)	0(0)	3(16.7)	5(10.9)
C ₂ 不変	5(26.3)	6(60.0)	11(37.9)	1(8.3)	3(33.3)	4(19.0)	15(30.0)
計	7(16.7)	6(40.0)	13(22.8)	4(16.0)	3(21.4)	7(17.9)	20(20.8)
	男 11 (16.4)			女 9 (31.0)			

(非:登= 22.8:17.9)
 男:女= 16.4:31.0
 改:不= 10.9:30.0
全体= 20.8 %

表4-23 運筆：2.遅緩

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	0(0)	0(0)	0(0)	1(7.7)	2(40.0)	3(16.7)	3(6.5)
C ₂ 不変	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(22.2)	2(9.5)	2(4.0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	1(4.8)	4(28.6)	5(12.8)	5(5.2)
	男 1 (1.5)			女 4 (13.8)			

(非:登= 0 :12.8)
 男:女= 1.5:13.8
 改:不= 6.5: 4.0
全体= 5.2 %

表4-24 運筆：3.弱圧

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	8(34.8)	3(60.0)	11(39.3)	5(38.5)	3(60.0)	8(44.4)	19(41.3)
C ₂ 不変	8(42.1)	1(10.0)	9(31.0)	9(75.0)	2(22.0)	11(52.4)	20(40.0)
計	16(38.1)	4(26.7)	20(35.1)	14(56.0)	5(35.7)	19(48.7)	39(40.6)
	男 30 (44.8)			女 9 (31.0)			

(非:登= 35.1:48.7)
 男:女= 44.8:31.0
 改:不= 41.3:40.0
全体= 40.6 %

表4-25 運筆：4.強圧

	A ₁ 非 行			A ₂ 登 校 拒 否			合 計
	B ₁ 男	B ₂ 女	計	B ₁ 男	B ₂ 女	計	
C ₁ 改善	9(39.1)	1(20.0)	10(35.7)	2(15.4)	0(0)	2(11.1)	12(26.1)
C ₂ 不変	4(21.1)	1(10.0)	5(17.2)	1(8.3)	1(11.1)	2(9.5)	7(14.0)
計	13(31.0)	2(13.3)	15(26.3)	3(12.0)	1(7.1)	4(10.3)	19(19.8)
	男 16 (23.9)			女 3 (10.3)			

(非:登= 26.3:10.3)
 男:女= 23.9:10.3
 改:不= 26.1:14.0
全体= 19.8 %

表5 『バウムテスト整理表』の項目における出現率の3要因の分散分析の結果
(出現率を角変換し、分散分析して χ^2 -値を求めた結果による。)

変動因 項 目	A 非:登	B 男:女	C 改:不	A × B	B × C	A × C	A × B × C
X強調B: 1.右強調	非>登 **			非男>非女>登男 ≠登女 *			
X強調B: 2.左強調	非<登 *	男>女 **	改>不 P<.20				
X強調B: 3.平 衡	非<登 *	男<女 *		登女>登男≠ 非男=非女			
XI傾向: 1.右への傾向		男>女 P<.20	改>不 ↑				
XI傾向: 3.傾向なし		男<女 *	改<不 ↑				
XII傾斜: 1.右への傾斜	非<登 *	男>女 *					登男≠登女改≠登男改≠非男改≠非男 不>非女不≠登女不>非女改 ↑
地平線: 1.地平線なし			改<不 P<.20		女不>男不=男改 >女改 P<.20		
幹の基部: 4.左ふくらみ			改>不 P<.20				
幹の基部: 5.右ふくらみ	非<登 ↑			登男>登女≠非男 >非男 P<.20			登男不>登女改>非女不>登男改≠非男 改≠非女改=登女不>非男不 *
幹の基部: 9.普 通	非>登 P<.20						
根: 根なし	非<登 P<.20	男<女 *	改<不 P<.20	登女>非女≠非男 >登男 *	女不≠男不≠女改 >男改 *		登女改>登女不>登男不≠非女不≠非男 不>非女改>非男改>登男改 ↑
根: 2～3本		男>女 ↑	改>不 **	登男>非女>非男 >登女 **		登改>非改>登不 >非不 ↑	
幹V: 2.細 い	非<登 P<.20	男>女 *	改<不 *		男不≠女不 ↑ >男改>女改		
幹VII: 輪廓 1.直線	非<登 *	男<女 ↑				登改>登不>非不 ≠非改 P<.20	
幹VII: 輪廓 3.散漫な線	非>登 *		改<不 **			非改≠登不>非不 >登改 **	
幹VII: 輪廓 4.断線		男>女 ↑				登改≠非不>非改 >登不 P<.20	非男不>登男改>非男改≠登女改≠登女 改≠登女不≠登男不≠非女不 P<.20
枝I: 1.枝なし(枝の数)		男<女 *	改<不 *	非女≠登女>非男 >登男 *	女不>男不≠女改 ≠男改 ↑	非不>登不≠非改 >登改 P<.20	
枝I: 2.4本以上(枝の数)			改>不 **	登男>非男≠非女 ≠登女 *	女改>男不≠男改 >女不 **	登改>登不≠非改 >非不 *	
枝VI: 1.管状枝		男>女 *					登男不≠非男改>非女改≠登男改≠登女 改≠非男不>非女不>登女不 ↑
冠I: 7.枝葉型冠			改>不 **		女改>男改≠男不 >女不 *		非女改>登男改≠非男不>登女改≠非男 改≠登女不≠登男不>非女不 **
発達遅滞と退行: 8.一級枝		男>女 ↑	改<不 *			登不>非不≠非改 >登改 ↑	
運筆: 1.急 速			改<不 **		女不>男不≠男改 >女改 **	非不>登不≠登改 >非改 P<.20	
運筆: 2.遅 緩	非<登 **	男<女 ↑		登女>登男≠非女 ≠非男 ↑			
運筆: 3.弱 圧					女改≠男不>男改 >女不 **		
運筆: 4.強 圧	非>登 ↑	男>女 P<.20					

(注) **→P<.01, *→P<.05, ↑→P<.10, P<.20→P<.20を示す。

「強圧」より) が、一面には意志力の強さがあり、積極性をもっている面がうかがえる。したがって、それなりに環境への対処に際して、能動性をもっているが、社会化した形でそれを出表することにやや欠けている点を注目してよいだろう。とりわけ、境界認識がはっきりせぬために社会が悩む行動に出やすいことを示唆しているように思うのである。

他方、登校拒否群（A₂）の方が非行群（A₁）より出現率の高い項目は、

- | | |
|------------------|---|
| ① X強調B：2. 左強調 | A ₁ ：A ₂ =24.6%：35.9% |
| ② X強調B：3. 平衡 | A ₁ ：A ₂ =40.4%：59.0% |
| ③ XII傾斜：1. 右への傾斜 | A ₁ ：A ₂ =21.1%：33.3% |
| ④ 幹の基部：5. 右ふくらみ | A ₁ ：A ₂ =15.8%：33.3% |
| ⑤ 幹Ⅶ：輪廓1. 直線 | A ₁ ：A ₂ =28.1%：51.3% |
| ⑥ 運筆：2. 遅緩 | A ₁ ：A ₂ = 0%：12.8% |

となっている。これらについてみると、登校拒否群は、内向的（主観性）で、しりごみをし、注意深く、慎重で、ちょっとしたことを気にやみ、そのために自分から容易にぬけだせない傾向にあり（以上「左強調」より）、そのために心理的のうごきがとれにくく平衡状態にあり（以上「平衡」及び「輪廓1. 直線」より）、権威をおそれ、用心と警戒をし、そのために非協調的となり（以上「幹の基部：右ふくらみ」より）、不活発（「運筆：遅緩」より）な状態になっていることが理解できる。いわば、環境からの刺激に対して、用心深く、消極的で、動きがとれにくい状態になっていることがうかがえるのである。

次に主効果のうちB要因（男 対 女）についてみてみよう。

男児の方が女児に比して出現率の高い項目は、

- | | |
|------------------|---|
| ① X強調B：2. 左強調 | B ₁ ：B ₂ =38.8%： 6.7% |
| ② XII傾斜：1. 右への傾斜 | B ₁ ：B ₂ =31.3%：13.8% |
| ③ 根：2～3本 | B ₁ ：B ₂ =16.4%： 6.9% |
| ④ 幹Ⅴ：2. 細い | B ₁ ：B ₂ =23.9%：13.8% |
| ⑤ 幹Ⅶ：輪廓4. 断線 | B ₁ ：B ₂ =35.8%：13.8% |
| ⑥ 枝：1. 管状枝 | B ₁ ：B ₂ =53.7%：27.6% |
| ⑦ 発達遅滞と退行：8. 一線枝 | B ₁ ：B ₂ =10.4%： 3.4% |

ここに示したように、高率に出現して有意差のあるもの、低率でありながら有意差のあるものなどがみられるが、上の結果から次のように考えることができる。すなわち、主観的（内向性）で、そのために拒否的となり、慎重で、ちょっとしたことを気にしながら、容易に自分から抜け出せないでいる（「左強調」より）。それでいて、すぐに影響され、誘惑されやすく、安定性が少ないのに、やや無思慮的に、自己を没入できる力をもっている（「右への傾斜」より）。つまり、内面的に強い葛藤状態におそわれていることがうかがえるのである。自我は相対的に弱く（「幹細」より）、依り所を求めており（「根：2～3本」より）、感受性がつよくて、境界認識がはっきりしない状態にある。つまり、自一他、自己一対象関係に問題があるように見受けられるのである（「幹：断線」より）。そして、易刺激的であるとともに、突発的行動に出やすく、衝動的な行動にはしりやすい傾向とともに、独立性に乏しく、確固とした態度をとることが出にくいのである（「管状枝」より）。それとともに、部分的に年齢の退行現象を示すものも見受けられる（「発達遅滞と退行：一線枝」より）。以上に述べた特徴は、男児全般についてのもので、ここではいうまでもなく、臨床的行動異常としては、非行も登校拒否も含まれているので、内容的に複雑な心的様相を呈していることはいうまでもない。

次に女児の方が男児に比して出現率の高い項目は、

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| ① X強調B：3. 平衡 | $B_1 : B_2 = 41.8\% : 62.1\%$ |
| ② XI傾向：3. 傾向なし | $B_1 : B_2 = 70.1\% : 89.7\%$ |
| ③ 根：根なし | $B_1 : B_2 = 61.2\% : 82.8\%$ |
| ④ 幹Ⅶ：輪廓1. 直線 | $B_1 : B_2 = 31.3\% : 51.7\%$ |
| ⑤ 運筆：2. 遅緩 | $B_1 : B_2 = 1.5\% : 13.8\%$ |

となっている。さして特徴は顕著には認められないが、心理的にどうふるまっているのかわからず平衡状態にあり、如何に行為すべきか迷っていることがうかがえる（「平衡」、「傾向なし」「輪廓：直線」より）。しかし、そのために、依存すべきものを求めており（「根なし」より）、精神的エネルギーが渋滞しやすく、硬直し、弛緩する傾向を帯びている（「運筆：遅緩」より）。こうした女兒における内的特徴についても、女兒全体としてくっついているために、非行や登校拒否をともに含んでいるので明確には固定しえない困難点をもっている。

主効果の第3のものとして、C要因（予後の「改善 対 不変」）についてみることにする。A要因（非行 対 登校拒否）、B要因（男 対 女）を込みにしての予後の改善と不変のみについてみると、改善群の方が、不変群より出現率の高い項目は、

- | | |
|-------------------|-------------------------------|
| ① XI傾向：1. 右への傾向 | $C_1 : C_2 = 23.9\% : 14.0\%$ |
| ② 根：2～3本 | $C_1 : C_2 = 23.9\% : 4.0\%$ |
| ③ 枝Ⅰ：2. 4本以上（枝の数） | $C_1 : C_2 = 65.2\% : 50.0\%$ |
| ④ 冠Ⅰ：7. 枝葉型冠 | $C_1 : C_2 = 45.6\% : 28.0\%$ |

といったふうになっている。枝は、環境との接点として重要なものであり、これが4本以上描出されているものが改善群に多く、また、枝葉型冠が改善群の方に有意に多くて、やはり、環境との接点に気をくばっている点、それなりに現実吟味の力が不変群に比して高いことをうかがわせているのである。そして、右への傾向を示しており、生への対決の領域に向かって、現実吟味しつつ立ち向かおうとしている点が、不変群との差異を見せているのである。根も2～3本は描出されており、しっかりと地面に根をはって、依り所を求めつつ行動しようとしている点がうかがえるのである。一過性に非行や登校拒否の状態に陥ったにせよ、こうした描出での不変群との相違は、現実には自己の置かれている環境とのあいだに吟味の力をただよわせており、そうした力を持ちあわせつつ、環境に立ち向かい、アプローチしようとしている（生への対決）点は注目すべきことであると思う。

他方、不変群の方が改善群に比して有意に出現率の高い項目は、

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| ① XI傾向：3. 傾向なし | $C_1 : C_2 = 67.4\% : 84.0\%$ |
| ② 幹Ⅴ：2. 細い | $C_1 : C_2 = 17.4\% : 24.0\%$ |
| ③ 幹Ⅶ：輪廓3. 散漫な線 | $C_1 : C_2 = 30.4\% : 38.0\%$ |
| ④ 枝Ⅰ：1. 枝なし（枝の数） | $C_1 : C_2 = 8.7\% : 24.0\%$ |
| ⑤ 発達遅滞と退行：8. 一線枝 | $C_1 : C_2 = 2.2\% : 14.0\%$ |
| ⑥ 運筆：1. 急速 | $C_1 : C_2 = 10.9\% : 30.0\%$ |

といった具合になっている。自我が弱く（「幹：細い」）、感受性が強く、境界認識がはっきりせず、自—他関係についての吟味の弱さを感じさせるとともに（「幹：輪廓、散漫な線」）、枝がなくて、環境との接点での調整や順応に困難があり、運筆が急速で、意志の活動性とともに

に、感情の生動性の激しさを示唆しているのである。その反面、心理的に平衡状態にあり、緊張が高く（「傾向なし」）、他方には、年齢的退行の心理的側面（「一線枝」）をしのばせている点が注目されるのである。

このようにみえてくると、C要因（予後の改善 対 不変）についても、やはり、非行と登校拒否、それに、男女が込みにされているので十分なことは言えないにしても、改善群と不変群とのあいだで、内面的心理過程の様相や、環境のうけとめ方にかなりの相違のあることが示唆されているように思う。そして、とりわけ強調しておきたいことは、こうした結果を、不変群について、どのように治療やカウンセリング、介助、援助に結びつけていくかということが重要な点のように思うのである。

さて、交互作用効果について試みることにしよう。

考察の都合上、 $A \times C$ の交互作用効果から始めることにしたい。ここに有意差の認められる項目は、表5にみるように、

- ① 根：2～3本 $A_2C_1 : A_1C_1 : A_2C_2 : A_1C_2 = 27.8\% : 21.4\% : 9.5\% : 0\%$
- ② 幹Ⅶ：輪廓3. 散漫な線 $A_1C_1 : A_2C_2 : A_1C_2 : A_2C_1 = 50.0\% : 47.6\% : 31.0\% : 0\%$
- ③ 枝Ⅰ：2. 4本以上（枝の数） $A_2C_1 : A_2C_2 : A_1C_1 : A_1C_2 = 72.2\% : 61.9\% : 60.7\% : 41.4\%$
- ④ 発達遅滞と退行：8. 一線枝 $A_2C_2 : A_1C_2 : A_1C_1 : A_2C_1 = 23.8\% : 6.9\% : 3.6\% : 0\%$

となっている。登校拒否の改善群（ A_2C_1 群）では、幹の輪廓に散漫な線があつて、不当に感じやすく、感受性がつよくて、自—他関係の境界認識がはっきりしないものは皆無であり、退行の指標としての一線枝を描出するものも皆無であることがうかがえる。しかし、根を2～3本描出し、枝を4本以上描くといったふうに、現実に立脚し、依り所を求めつつも、環境との接点に気をくばって、適応しようとの現実吟味の力のあることを示唆しているものの多いことが注目されるのである。非行の改善群（ A_1C_1 群）では、幹を散漫な線で描くものが多くて、易感性を保持し、環境との境界認識が不明確な面をもちつつも、一線枝描出による退行的傾向はあまり見受けられず、枝を4本以上描くことによって環境との接点において適切な順応をしていこうとする力が見受けられ、根も2～3本描出するものも多少みられていることから、現実的に依り所を求めようとしている面が示唆されている。他方、登校拒否の不変群（ A_2C_2 群）では、枝を4本以上描出することによって環境との接点に気をくばっているが、退行傾向（「一線枝」）が他の3群に比して相対的には高く、輪廓を散漫な線で描いているものも半数近く見受けられて、感受性が強く、自—他関係がはっきりしないもののがかなりいることをうかがわせるとともに、根を2～3本描くものが相対的に少なく、不安定な状態をはのめかしているのである。非行不変群（ A_1C_2 群）では、枝を4本以上描くもの、根を2—3本描くものは皆無で、環境との接点に現実的に気をくばる力が弱く、不安定な内面を吐露しているとともに、退行的傾向（「一線枝」）は少ないが、輪廓を散漫な線で描出して、境界認識の欠如するもののがかなりいることがうかがえるのである。

以上のように2要因（AとC）を考慮に入れると、臨床像との関連において、それぞれの下位群の心理的、内的過程と、彼らの環境の認知様式のようなものが、かなり明確化されてくる

ように思うのである。

しかしながら、2要因の交互作用のうちでも、性差（B要因）を考慮したA×Bの交互作用や、B×Cの交互作用については、ここに示された結果は、極めて示唆に富むものではあっても、性差的特徴の関与したものについては、それぞれの男児なり女児なりの生育環境なり、養育過程なりとの関係を十分に検討してみないと、概括的な解釈を施すことには、かなりの無理があり、あまりにも主観的になりすぎるので差しひかえておきたいと思う。ただ、上でも述べたように、性差を考慮した場合に、ここにみられるような交互作用がみられることは、極めて重要な事実で、男児と女児とで採択すべき解釈仮説もそれに応じて変化させることの必要性を物語っているように思われる。

このような理由のもとに、A×B×Cの二次交互作用についても、ここでは考察を言及することを保留しておきたいと思う。

IV 結論と要約

非行または登校拒否という適応障害ないしは行動異常を示す中学校期の子どもについて、相談所に来所した intake 時に、K. Koch の提唱するバウムテストを実施、これらのバウム画を、臨床群（要因A：非行 対 登校拒否）、性別（要因B：男 対 女）、予後（要因C：改善 対 不変）の3つの要因を考慮して分析検討を試みた。具体的な被験対象児は、すでに報告した一谷・西川（1983）のものと同じであるが、要因のとり入れ方に更に細分化を試みたのである。

資料の処理に際しては、『バウムテスト整理表』を用いて、この手引きにそって忠実に行了った。各下位群について、空間利用の領域の様相と、詳細な描出パターンの様態について、『整理表』の項目に従って頻数を求め、百分率に改めたうえ、角変換を行なって、分散分析にかけ、 χ^2 -値によって有意差を検定した。

この結果について K. Koch の解釈仮説に従って吟味検討を加えた。結果は、とりわけ、要因Aと要因Cの交互作用効果に関して、治療やカウンセリング、矯正教育などのあり方に示唆を与えるものであった。要因Bの関与するものについては、解釈の困難な点があり、結果を提示するにとどめた。

参 考 文 献

- 林勝造・一谷 彊（編著）1973 バウムテストの臨床的研究 東京 日本文化科学社
- 林 勝造・国吉政一・一谷 彊・西川 満・津田浩一 1982 バウムテストにみられる非行と登校拒否（Ⅱ）
日本教育心理学会第24回総会発表論文集 筑波大学 pp. 800-801.
- 一谷 彊・山下真理子・津田浩一・林 勝造・国吉政一 1983 不純異性交遊児童の人格像——バウムテストによる検討—— 京都教育大学紀要 Ser. A, No. 62, 17-39.
- 一谷 彊・西川 満 1983 バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 京都教育大学紀要 Ser. A, No. 63, 1-23.
- 一谷 彊・津田浩一 1982 『バウムテスト整理表』の作成とその具体的利用 京都教育大学紀要 Ser. A, No. 61, 1-22.

- 一谷 彊・西川 満・村澤孝子 1983 バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴(2)——年齢別による比較—— 日本教育心理学会第25回総会発表論文集 熊本大学 pp. 810-811.
- 一谷 彊・横山基弘 1981 高校生のバウムテストにみられる空間利用の領域——生徒理解と指導のための補助手段として—— 京都教育大学教育研究所所報 第27号 313-319.
- 一谷 彊・横山基弘 1979 樹木画の全体印象と高校生の不適応行動との関係——バウムテストを中心に—— 京都教育大学紀要 Ser. A, No. 55, 1-22.
- 一谷 彊・西川 満・津田浩一・林 勝造 1982 バウムテストにみられる中学生の非行と登校拒否 日本心理学会第46回大会発表論文集 京都大学 p. 345.
- 岩原信九郎 1977 新しい教育・心理統計ノンパラメトリック法(第8版) 東京 日本文化科学社(初版1955)
- Koch, C. 1952. The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis. Bern: Hans Huber.
- Koch, K. 1949. Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Hans Huber.
- Koch, C. (著)・林 勝造・国吉政一・一谷 彊(訳) 1970 バウム・テスト——樹木画による人格診断法—— 東京 日本文化科学社
- Koch, R.・林 勝造・国吉政一・一谷 彊(編著) 1980 バウム・テスト 事例解釈法 東京 日本文化科学社
- 国吉政一・林 勝造・一谷 彊・津田浩一・斉藤通明 1980 バウムテスト整理表 及び 手引 東京 日本文化科学社
- 西川 満・一谷 彊・村澤孝子 1983 バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴(1)——中度・軽度による比較—— 日本教育心理学会第25回総会発表論文集 熊本大学 pp. 808-809.
- 西川 満・一谷 彊・村澤孝子 1983 バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴(4)——就労の有無による比較—— 関西心理学会第95回大会発表論文集 立命館大学 p. 49.
- 西川 満 1981 バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 心理測定ジャーナル Vol. 17, No. 12, 2-6.
- 村澤孝子・一谷 彊・西川 満 1982 バウムテストよりみた中学生の登校拒否 関西心理学会第94回大会発表論文集 滋賀大学 p. 24.
- 村澤孝子・一谷 彊・西川 満 1983 バウムテストにおける精神遅滞者の反応特徴——神経症や精神病様状態を伴う精神遅滞者の場合—— 日本教育心理学会第25回総会発表論文集 熊本大学 pp. 812-813.
- 津田浩一 1980 「バウム・テスト整理表」の紹介(Ⅰ) 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 9, 17-22.
- 津田浩一 1980 「バウム・テスト整理表」の紹介(Ⅱ) 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 10, 2-8.
- 山下真理子・国吉政一・林 勝造・一谷 彊・津田浩一 1982 性非行児のバウムテストにみられる人格像 日本心理学会第46回大会発表論文集 京都大学 p. 394.